

## 障害史研究 (Disability History Studies) のための 日本古典文学研究序説

福田, 安典  
日本女子大学

<https://doi.org/10.15017/2740988>

---

出版情報 : 障害史研究. 1, pp.1-14, 2020-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 障害史研究 (Disability History Studies) のための 日本古典文学研究序説

Japanese Classical Literature Research and Disability History Studies

福田 安典

Yasunori FUKUDA. Ph.D. (Letters)

(日本女子大学)

(Japan Women's University)

## 要 旨

本稿は日本古典文学研究の障害史研究における寄与を問う試論である。日本古典文学は、障害者という概念が成立する以前の文献を扱う。そのために障害や障害者に関する用語や登場人物、ストーリーを有するものが多くある。そして活字本やデータベースでも容易に拾い上げることのできる環境がある。その状況の中で日本古典文学研究は障害史研究といかに関わるのであろうか。

本稿はこの問題に対して「狂」を取り上げて論じる。構成は以下の通りである。「1 日本古典文学における「狂」」では、日本古典文学における「狂」を取り扱う。古典文学では、狂言や狂歌などのように「気が狂う」こととは別に「狂」が一般化されている。その延長で「風狂」「狂狷」が位置づけられるので、「江戸狂人伝」といった書物も出版される。しかしながら、この「狂」が精神疾患と無縁ではないことを「2 日本古典文学における「狂人」その1」、「3 日本古典文学における「狂人」その2」で具体的な事例をあげて論じた。志が大きく周囲と迎合しない高邁な行動力の持ち主が「狂狷」、その人を指す言葉が「狂人」であると文学用語は規定されている。その狂狷と似て非なる者は「狂蕩」と呼ばれる。一見明確なこの定義は実は明確ではなく、そのダークゾーンがあることを『不可得物語』から導きだし、そのダークゾーンがミシェル・フーコーの「狂気」と重なることを論じた。その観点から『徒然草』『父の終焉日記』『百万』と『東海道中膝栗毛』の狂人描写を通観すれば、やはりそこに異相が認められて奇麗に論じ分けることができない。

そこで、精神神経医学の観点から小田晋、特に彼が病誌学的方法で取り上げた「狂気」の一症例の平賀源内を取り上げた。小田は源内の事跡に文学作品を絡ませて彼を分裂気質的要素を混ぜた循環気質者と断定する。ここで重要なことは、小田の学問や診断が成り立つためには、その伝記的人物の正しい伝記や作品論が揃っていることである。そして、その原拠たる正確な伝記や作品論を提供できるのは日本古典文学研究だけである。

「4 狂気と創造」では、少し観点を変えて狂気が名作の創作に関わるのか否かという点について、平賀源内を論じた。源内は狂気故に日本文学史上に輝かしい軌跡を残したのだろうか。ここに於いてもやはり平賀源内の正しい伝記資料が扱われていないために病誌学的方法の限界がある。その正しい判断は日本古典文学研究の成果を待たねばならないのである。この現象は現代の精神病理学の病跡学でも同様の指摘が可能である。ここに障害史研究のための日本古典文学研究の必要性という結論を導きだした。

最後に、源内が周囲から愛された事実にわれわれが障害者と「共生」するためのヒントがあるのではないかという展望を述べた。

ABSTRACT

This paper examines the relationship between studies into Japanese classic literature and disability history research. In it, we discuss the use and meaning of kyo (狂) “mad/madness”.

We see two uses of “madness” in Japanese literature. One is the “madness” seen in terms such as kyogen (狂言) and kyoken (狂狷), and then there is the sort of “madness” found with fukyo (風狂) “insanity” and kyoki (狂気) “insanity/madness”. The final form of madness, kyoki, has often been associated with “creation” or “creativity”, but in order to pursue this line of study in greater depth, further research into biographical studies of Japanese literature is needed.

(Note: The terms/translations—including keywords—used here can reflect the fact that this research deals with classical literature of a time when the terminology used could be different from that of today.)

日本古典文学研究と障害史研究との間には大きな壁があり、相容れない研究領域なのであろうか。本稿ではその問いより起筆する。

障害史研究とはまったく関わらない地帯に研究領域を持つかに見える日本古典文学がその実、障害及び障害者に対して意識的でなければならぬと判断される第一の理由として、古典文学作品の中に多くの障害及び障害者についての表現が有り、それが秘匿されるどころかオープンに公開されている現状を挙げることができる。日本古典文学の中で汎用性の高い本文を提供しているのが岩波書店の刊行した日本古典文学大系である。1957年から1962年にかけて第1期66巻が刊行され、第2期として1967年までに計100巻が刊行された。現在、ほとんどの大学図書館に所蔵され、研究機関や公共図書館でも所蔵館は多い。高校以下の教育機関でも所蔵されていると思われる。そして、研究機関限定であるが、国文学研究資料館のHPからその全文のテキストデータとデータベースが公開され、キーワードによる検索利用が可能である。いわば公的に認められた古典テキストだといってよい。日本に限らず全世界がこのテキストを用いて日本文学の論文を執筆することが許されているし、またこのテキストに拠ることが一定の学問水準と考える研究者も少なからずいることが想定できる。

試みに、そのデータベースによって、『Keywords for Disability Studies』（2015年、NYU Press、Rachel Adams・Benjamin Reiss・David Serlin 編）に掲載されているキーワード<sup>(1)</sup>に対応するのではないかと思われる「日本古語」を検索すれば、またたく内に多く

の用例を得ることができる。2、3例を挙げてみる。

①暗々になりて、さりとは、かくてあるべきならねば、歸ける道に、ひとつ橋に、目くらが、わたりあひたりけるを、この恵印「あな、あぶなのめくらや」といひたりけるを、めくら、とりもあへず、(『宇治拾遺物語』)

②廿四五のよめらしき女。七十あまりのめくらばあさま、姑と見えて、法体したる人の手をひき(『浮世風呂』)

③有徳人 これはこのあたりに住まい致す者でござる。某思う子細あって、かたわ者をあまた抱ようと存ずる。(『三人片輪』)

④聾者見花 紀定磨  
つんぼうはをのれが耳の遠山にかすめる花の香はきこえまし(『徳和歌後万歳集』)

ここに挙げた例はほんの一部であって、上記データベースでは70例以上がヒットする。検索語を増加させれば当然その用例数は増加するが、本稿で問題とするべきことはその実数確認ではない。その実態である。

われわれは日本古典文学をどこか現実と乖離した無菌室の中で護っており、そこには世間からの厳しい風を取り込まないように「無意識」に隔離している。古典作品の中に障害及び障害者を扱う表現があ

るのほうすす承知していても、だからそれをどうこうする必要も積もりも無い、関わることは避けたいという風潮があるように思われる。

一方で日本古典文学研究者およびその応援者達は、いまや社会的に厳しい眼にさらされている古典について、その魅力と研究の重要性を訴えたがっている<sup>(2)</sup>。またその際にはできるだけ原文を、当時の作者や読者の感覚で扱うことを望んでいる。しかしながら、こと障害史との関わりに関していえば、古典文学愛好者はどこまで自覚的であろうか。少し古典の読書量が増えれば、多くの障害及び障害者に関する記事や文章に出逢うというのに。

この点について松井彰彦が次のような発言をしている<sup>(3)</sup>。

学術創成研究部門に、「総合社会科学としての社会、経済における障害の研究」(通称は、READ: Research on Economy And Disability) というプロジェクト名で申請するにあたって、必ず入れなくてはならないと考えていた部門があった。それが、歴史部門である。「障害」という言葉は、それが人を指すものであれ、社会と人との関係を指すものであれ、時代とともにその意味内容を変えてきた。現代の障害問題を読み解くためには、その歴史的な経緯を知る必要があると考えたのである。

この松井の指摘に異論を唱えるわけではないが、その問題意識を鮮明に「読み解くため」には、歴史部門だけではなく「日本古典文学部門」にも視座を拡充すべきではないだろうか。松井はその後にも、

READ の歴史グループの重要な点は、いわゆる障害者運動以前の歴史に焦点を当て、「障害」ないし「障害者」という呼称が定着する前の「障害者」たちを見据えているところにある。

として、「まだ「障害」という言葉が定着していなかった時代を知ることが肝要である」とする現代の障害史研究に於ける歴史グループの重要性を述べる。さらに「神々の時代にはいまであれば障害者と呼ば

れるような者たちが大切な役割を担っていた」例としてヘーパイストスを例にあげるが、その言説をそのままに日本古典文学の側で引き取って、エビスや光明皇后と聖の話型に落とし込むこともまた日本古典文学では可能である。すなわち、「障害」「障害者」という呼称が定着する前、障害者運動以前の状態にあって、障害者たちの毀誉褒貶・聖化・蔑視を包括的に論じることができる点に日本古典文学研究の特長があるのではないかと考えるものである。

折しも、日本古典文学への冷たい風が吹き始めている。その右肩下がりの研究領域に於いて、かかる社会的問題への積極的なアプローチの必要性は認められよう。本稿をなす所以である。

本稿ではその問題意識から、「狂」「気が違う」を取り上げて考えてみたい。

## 1 日本古典文学における「狂」

日本古典文学において「狂」という言葉はいくつもの様相を持ち、一つ概念では括れない。狂言綺語や芸能の狂言などについては「気が狂う」との関連性は認められず、堂々と市民権を得ており、障害問題と連動することはない。しかしながら微妙な例もある。例えば「狂女物狂い」は能楽の1ジャンルとして、「風狂」は世間から逸脱した自由闊達な生き様として、その文芸用語はほぼ一般化しているが、そこに障害者と連動が見られるものがある。ネット検索が可能な辞書類の記載から1、2例をあげてみる(傍線部は筆者)。

狂女物 狂女を主人公とした能。四番組物に属する。「隅田川」「三井寺」「班女」「花筐」など。

(小学館『日本国語大辞典』)

風狂

「風」は「瘋(ふう)」に通じ、狂人をさして風子、風癪(ふうてん)、風漢などとよぶ。「風狂」とは(風が狂おしく吹くという意味は別として)、もと狂気、狂人を意味した。隠逸の高士寒山(かんざん)が「風狂夫」(『山堂肆考(さ

んどうしこう)』)、「風狂の士」(『寒山子詩集』序)と、また拾得(じつとく)が「風狂に似たり」(『寒山子詩集』序)、「風狂子」(『沙石集(しゃせきしゅう)』)とよばれたというのも、彼らが凡俗の目には狂人としかみえなかったということである。しかし「狂」の語は単なる精神疾患の意を超えて用いられた。李白(りはく)が「我はもと楚(そ)の狂人」と自称し、葛飾(かつしか)北斎が「画狂老人」と自署するとき、彼らは自分が世間の標準から外れていることを自認してはばからない。人は世間の規範からの逸脱を肯定的にとらえて「狂」とよぶ場合があり、日本において中世以降「風狂」とはそのような「狂」の形態の一つをさす。その「狂」の系譜は、大略次の四つになる。

(1) 物狂い 「くるう」の語源は神がかりしてくるくる回ることといわれるように、日本人は狂気を憑(つ)き物による現象とみなした。世阿弥(ぜあみ)以前の能にみられる物狂いはほとんど他の霊に自分の精神を乗っ取られるものである。しかし世阿弥は憑依(ひょうい)のほかに「思い」による物狂いのあることをいい、これを重視した。それは一つの思念に執したあげく、その思念に自分の全精神を乗っ取られるものである。たとえば、奪われた子を尋ねてはるかな旅をする母の物狂い。これは狂気の一種には違いないが、その思いの深さは人を感動させることができる。

(2) 数寄(すき) 元は「好き」と同語であるが、やがて愛好の度が過ぎて常識人の平衡感覚を失った態度をさすようになった。ただし、実用事への情熱を数寄とはいわない。「あだ事」とりわけ風雅の道(歌道、茶道など)に凝るものをいう。たとえば、歌枕(うたまくら)として有名な長柄(ながら)橋の柱の削り屑(くず)をだいじに持ち歩いたという歌人能因(のういん)。数寄は風雅への思い入れの深さのゆえに偏執的になったものであるが、物狂いの一步手前にとどまっている。数寄者(しゃ)は奇人変人ではあっても精神障害ではない。北斎の「画狂」も絵画への偏執の意味である。

(3) 遁世(とんせい) 精神や性格の異常ではなく、自らの意志で選ばれた生き方である。たとえば鴨長明(かものちょうめい)の『発心(ほっしん)集』は、極楽往生を願って世俗的所有物のいっさいを捨てた隠者の伝を多く伝える。彼らにとって遁世とは、家を捨てて寺に入るのではなく、すでに世俗の体制に組み込まれた寺をも捨てて隠棲(いんせい)することを意味した。彼らは真の「放下(ほうげ)」を目ざしてひたすら俗から逃走し、追いかけてくる名誉や利益から身を隠す。しかし、俗からの脱出が人の世からの逃走であるうちはまだ消極的な脱俗である。

(4) 風狂 (a) 前記の(3)を一步進めたものとしての風狂がある。これは自由を求めて世間から逃走するのではなく、すでに精神が自由となっているために世間の規範を超越するものである。かならずしも山中に隠棲せず、あるいは乞食(こじき)となって市中を横行し、ときに色街に戯れることをためらわない。しかし世俗の価値基準は眼中になく、常識からみれば奇行の連続であり、その存在自体が俗世間への批判となる。その代表者は自ら「風狂の狂客」と号した一休である。このとき、「風狂」とは自由なる精神と同義となる。

(b) 前記の(3)の影響を受けつつ(2)を一步進めた風狂がある。仏法ならぬ風雅への思い入れの深さから世を捨てるものである。常識的な人生を逸脱し、無一物、一所不住の自由な境涯にあって、花鳥風月とともに生きることを楽しむ。「風雅の魔心」(「栖去之弁(せいきよのべん)」)に憑かれた漂泊の詩人芭蕉(ばしょう)がその代表である。

日本人にとって「風狂」とは生き方の理想の一つをさすことばであり、「私たちを縛る世俗的なもの(常識、所有物、家庭など)からの自由」を意味の中核とするが、時に応じて反骨、旅、文学などの要素を含むものである。[尼ヶ崎彬(小学館『日本大百科全書』)

これらの辞書的記載の傍線部を付した箇所注目

すれば、日本古典文学用語における「狂」は精神疾患の「気が狂う」と底辺ではつながっていると認識されているようであり、狂言という用語の「狂」とは差違がある。

この女物狂や風狂に加えて、「狂歌」「狂詩」「狂文」という文芸ジャンルがある。狂歌については現代でも往々にして見られる文学形式で、正統な和歌に対しての卑俗な短歌をいう。古くから興を添える文芸であったらしく、『万葉集』の戯笑歌や『古今集』の誹諧歌、中世の落首なども含めて、江戸期に大流行した。「狂詩」も正統な漢詩に対してそれを崩したスタイルのものをいう。「狂歌」「狂詩」ともに正統に対する異体であることを「狂」の文字と概念で表現しているの、その点だけにセンシティブに反応することが可能ではあるが、実態として天明期にブームを迎えたので「天明狂歌」という言葉があたりまえに飛び交い、そこでは「文章には不適切な表現があるが、当時の表現を重んじてそのまま表記した」というような但し書きが書き込まれることがない。「狂」の語に障害を重ねて理解することは少ないのである。明らかに狂女物や風狂よりも「狂う」ことへの意識が希薄なのである。もっとも狂女物や風狂などの語を使用した著述であっても、先述の但し書きは見られずおおらかに文芸用語として通用し、日常会話でも憚られることがない。

このように「狂」についての日本古典文学領域における扱いについては平和で牧歌的であるように見えるが、同じ概念を含むと一見とらえがちな「狂文」を考えてみると、その牧歌的理解は再考を迫られるであろう。「狂文」は正統な文章に対しての異体を示す「狂」ではないのである。

狂文についての代表的見解は中野三敏「狂文意識の背景」に詳しい<sup>(4)</sup>。中野は、

発生期の「狂文」を支えたのは「狂」の意識であると断言してよい。そして、近世的な「狂」の意識とは、極く常識的に考えて、中世以来の風狂、風流の伝説に、新しく「論語」に所謂狂簡、狂狷の思想を加味したものと推定しよう。

として「狂文」を定義する。中野によれば「狂」の

概念は『論語』『孟子』などに見える狂簡や狂狷の概念に近世期の文人達が共感した際に生じた、日本文学思潮や生活態度、社会に対する身構えを端的に示すタームだということである。やや長いが中野の文章を引用しておく。

孟子が答えて、中道の士、狂者、狷者、郷愿の四態の人物論評を行なうのであるが、即ち狂者とは進取志大、嚶々然とし志も言も大きく、今世を蔑視して古人を慕うが、言論の方が実行よりも高く、言行相あたらずる者の謂いであり、狷（獯）者は常に躡々として独り行き、涼々として人に親しまれず、他人の不潔な行為をにくみ恥じて孤高を自守する者を謂う。更に郷愿は専ら今世の俗に従い、人に媚びて、人に善とせらるるを期待する者で、徳に似て非なる者、徳の賊である。そして孔子の理想的とした人間は中道の士、即ち中和均整のとれた思想行為を果たす人物であるが、その人の得難き時に其次位を占めるのが狂者であり、狷者はそれに次ぐ、

すなわち狂文意識を支える狂者は志が大きく信念が強い人物のことであって、時にはその激しい性格が一般常識と乖離することはあってもあくまでも、「健常者」の範囲であるというのである。その中野の理解からは次の定義が生まれる<sup>(5)</sup>。

「狂」は通常「正」に対する語として用いられようが、この場合それでは精神錯乱者、気違いの意味にとられやすい。文芸、思想の範疇語としての「狂」は「俗」の対語として把えるべきであろう。その意味で吾国には、「風狂」の精神の伝統があった事を指摘し得る。しかし中世の仏者の、殊に禅家の間に顕著な発動を見たこの精神も、やがて近世に入り、時代の要求として儒教的精神が瀾漫し始めると、次第に儒教的な「狂」の解釈に交代させられる。

「狂」と対峙すべきは「正」ではなく「俗」としたことで近世期の狂文は高邁な位置に引き上げられ、中世の「風狂」がまだ引きずっていた「狂気」とは

劃然とした一線、すなわち精神錯乱者と線引きがなされる、という定義づけである。その理論から生まれた中野三敏の『江戸狂者傳』（中央公論新社、2007年）について、誰もが医学関係の著書とみなさないという風潮がある。

ところが、この中野の奇麗な定義づけでもまだ取りこぼされている問題が残っている。その一つが、「狂狷」と類似する「狂蕩」である。「狂蕩」については倉田貞美の発言を引いておく<sup>(6)</sup>。『論語』において政治的活動を断念し郷党子弟の教育に専念する際に「狂者」を鼓舞した文章に続けて、

何の理想も持たない青年、意志の薄弱な青年、そんな者は孔子から見れば、教えるに値しない存在であった。「青年よ大志を持って」という言葉は、孔子の言を借りれば、「青年よ狂者たれ」ということにもなる。

古の狂や肆、今の狂や蕩。(論語・陽貨)

とも、孔子は言っている。古の民にはいくつかの欠点がある。その一つが狂である。しかし、その狂は高い理想を持っていて、小節にこだわらず、言いたいことを言い、したいと思うことをしたが、現在ではそういう狂はいない。今の狂というのは、何らの理想もなく、ただでたらめにしたい放題のことをしているに過ぎない、という嘆きである。今日われわれの周囲にも、この二種類の狂者がいるのではないかと思われる。

とする(傍線部、筆者)。倉田によれば、狂者には「二種類」があって、高き理想に燃えるために小節にこだわらない者が「狂狷」として評価しうる狂者であり、一方、理想もなく「でたらめ」なことをする狂者が「狂蕩」であることになる。前者が中野のいうところの狂者であることは明白だが、後者の狂蕩に分類される狂者たちは、果たして「でたらめにしたい放談」をする生活破綻者や禁治産者に近いということなのであろうか。すなわち、狂者を高い理想の有無をもって「狂狷」と「狂蕩」に二分するのがこの倉田の理解であるが、その論理の延長にはこの二種類の狂者のうち、後者の非生産的な狂者は理想の欠如故に社会に役立たないという判断基準が用意

されることとなる。その結果「狂狷」は社会に位置することはでき、「狂蕩」は社会から隔絶されるという理論構成が可能となるが、果たして両者の明確な切り分けは可能なのであろうか。何をもって社会に役立つかの判断はあくまでも主観に左右されることであって、その意味ではこの切り分けには切り分けることのできない事例が存在するはずである。この倉田のような浅薄な二分論的理解を持つ現代人が少なからずいるとして、彼らが中野の明確な定義を支持しているのだとすれば、それは日本古典文学における「狂」の問題はやはり中野の明確な定義とはうらはらに、主観や偏見により揺れ動く要素を有していることになるのではないだろうか。

## 2 日本古典文学における「狂人」その1

日本古典文学における「狂」の実例を検討してみよう。

近世期にみずから狂人を名乗ったのは画狂老人(葛飾北斎)がすぐに思い浮かぶが、その他にも狂斎、狂作天口斎、白狂、黄花狂士、狂画堂、狂訓亭、狂庵主人、狂蝶子、花狂社、湖狂生、文狂斎、狂詠舎、狂平、酔狂老夫、清狂、傘狂、狂而堂、俳狂人、房狂散人、仏狂子、文狂亭、只狂、連女狂人などの夥しい人物が狂を名乗っている。書名でも『勞四狂』『風狂文章』『三狂人』などの作品がある。「狂」の流行を知ることができる。これらは一見、先の「狂狷」の範疇に収まりそうである。すなわち、高尚な理想故に社会とは一線を画するものの、それでもその知見や創作は社会に認められるものであって、きちんと社会に座る位置があるというのである。

その狂狷を主人公とした作品に『不可得物語』(正保5(1648)年刊行)がある(用字は一部改めた。レは返り点、傍線は筆者、以下、同書からの引用は同之)。主人公は、

性、癖にして世中の人情を外になし、身を立る事を顧ず、似合せしき小知行を君に辞し(筆者注:収入が不要)、去るも来るも行跡(かうせき)みな人に違ひ、世に背き侍るとて君も疎んじ旧友も遠くなり、狂人と嘲り、世に被<sub>レ</sub>捨(す

てられ) 人と名付てよぶ。よしよし恨むべからず。唐の五柳先生・郭橐駝(筆者注:唐の自由人)がごとく、我と糸ほしの面白や。かく成り行く程に、我等ごときの被<sub>レ</sub>捨人は、慈悲の国にたちよらずば飢寒堪がたかるべし。

(引用は『假名草子集成』60巻(東京堂出版、2018年)より、263頁)

という設定で各地を回り、世間の常識人や智者と呼ばれる人物に論争をしかけていくストーリーで、鲁迅の『狂人日記』の日本古典文学版ともいえる。先の中野が指摘した狂人の典型的な造型とみえる。ところが、彼の実験を検討してみると簡単に「高尚な理想があるゆえに社会に座る位置がある」とは言えない。一例として上京の辺に住んで人を論じるのが好きな「口才の入道」との論争を見してみる。

入道曰く、「汝、狂慢の心有て、我が性を養ふ事を知らざる也。それ人と生まれては、「有<sub>レ</sub>家<sub>有</sub>二妻子<sub>一</sub>」。又、口身あるゆへに世を渡る業(わざ)をなす。一年のはかりごと、千歳の憂いをいだき、鬱憤ここにせまり、我が齢ひの重なる事も顧みず、年々春を待ち楽しむならひなり。誠によるづの小鳥までも春を悦ぶ心やらむ、声もさだかに囀るに、汝、人なるを以て、鳥にだにもしはず。又語るべし」。

(狂人が) 答て曰く、「世中の人情恩愛におぼれ、子孫の寵愛古今の習ひなり。我は又苦しみを つみて楽しみとおぼへ、きづなを求て是を愛すとおもひ、かつて羨む心なし」。

入道曰く、「天地の種類人倫おほひなり。子孫の繁昌恩愛を楽しまずば人倫の乱也。天地陰陽の道理に随ひ、夫婦の心なくは、物の哀れも知るべからず。世人に背き、世に被<sub>レ</sub>捨事、茲(ここ)に迫る。人道欠けたり、馬鹿狂人」と罵る。

被<sub>レ</sub>捨人曰く、「我が狂はずでに醒めんとし、汝が狂は日々に興(おこ)らんとす。又、ものゝ哀れは夫婦の中、愛子より知る事なりといへども、往古は知らず、今の世の人を見侍るに、我が子の寵愛を思ひ、他の子に施す人もなく、

人の子の芸能衣食道具まで我が子に貧り与へんことを願ひ、かへつて人の子を嫉むとみえ侍る也。(中略)」

入道、大に腹を立て、「汝が五尺形骸を人間界に捨てられし、人に背くを規模となし、しかも是非を知りながら、その身に求めて改めざるは、都にをひては狂人と云」。

被<sub>レ</sub>捨人曰く、「世々の人、汝等常住坐臥、一時として狂せざることなし。貪心名利好色の人を酔わせて、狂惑する事身に付る」

(同書、265頁)

この狂人「被<sub>レ</sub>捨人」の姿にミシェル・フーコーのいう「狂気の人」と「理性の人」との対立構造を重ね合わせてもよいであろう。この「被<sub>レ</sub>捨人」は江戸期にしばしば言及された「言テモ聞ヘザルコトヲ云者ハ狂人ナリ。狂人ガ争テ療治スベキ」(石田梅岩『都鄙問答』)とされる治療不能、会話不可能な狂人として読み替えることができる。理性の人(入道)が彼らのために語る(もしくは社会秩序を成り立たせる)正しい言説は彼らに届かず、理性の人が正しく彼らを支配し導こうとするが彼らは支配されない。その支配は狂気の人からすれば「無秩序で無益な学問に対する懲罰」であるからである<sup>(7)</sup>。まさにミシェル・フーコーのいう狂気の人／理性の人の対立構図に、この「被<sub>レ</sub>捨人」と入道が合致しているのである。その合致が認められれば、この「被<sub>レ</sub>捨人」からは高邁な思想ゆえに社会に座る位置を有する「狂人」の姿とともに、社会から隔絶される、狂人とは似て非なる「狂蕩」の姿を見いだすことも可能である。中野が奇麗に精神疾患者と狂人を区別しようとしても、実態は「狂気の人」という大きな枠組みの中で重なり集合を持つ集合分け(集合記号で示せば「精神疾患∩狂人」があること)が確認できるだけではないだろうか。

### 3 日本古典文学における「狂人」その2

そこで改めて日本古典文学における狂人の例を見してみる。

本居宣長が藤井貞幹のことが許せず弾劾した書

物名は『鉗狂人』である。これは文字通り、このような狂人は鉗（鎖をつけて隔離）せよとのことであるので、藤井貞幹が中野の言う狂狷であったとしても、ミシェル・フーコーの言う「理性の人からの監禁」の意味を含むので「精神疾患の狂狷」と解釈することが可能である。有名な「狂人の眞似とて大路を走らば則ち狂人なり」という『徒然草』の警句の狂人も同様であろうし、

父を何となぐさめんとおもへば、胸せきふさがり、忍び落る泪は大道を潤し、ゆきゝの人の狂者と笑んもはづかしく、しばらく手を組み首をうなだれて、心をしづめける。

（小林一茶『父の終焉日記』、日本古典文学大系58巻 415頁）

と小林一茶がいう時、父との死別を前に大道で泣き崩れる姿を行人が規定する「狂者」も「精神疾患の狂狷」であろう。この一茶のありかた、父の死に際しての「狂者」という慟哭の表現が詩的存在を認められるなら、謡曲の物狂いの、

ワキ詞 いかにか狂女、おことの国里はいづくの人にてわたり候ふぞ

シテ詞 これは奈良の都に百万と申す者にて候

ワキ詞 それはなにゆゑかやうに狂人とはなり給ひて候ふぞ

シテ詞 夫には死して別れ、ただひとりある忘れ形見のみどり子に生きて離れてさむらふほどに、思ひが乱れて候ふよ

（謡曲『百万』、日本古典文学大系40巻 196頁）

という表現の抒情性も許されるであろうし、実際に高い芸術性を評価されている。高い理想を有するがゆえに社会に位置を許されるわけではない「狂人」が、「文学性」という抽象性が高く主観性の介入が強いエリアで座る位置が与えられていることとなる。ゆえに、『徒然草』『父の終焉日記』『百万』はわれわれが「安全」に扱うことが許されている。

しかし、全く同じ事情を語る以下の場合はどうであろうか。

あんま「ソレお見さい。あの氣ちがひどのは、こゝの下女でおざつたが、御亭主がふつと手をつけられたを、かみさまがひどいやきもち焼きで、あの女をぶつたりはたいたりして、とうとうさらけだしおりましたが、とかく御亭主は不便がつて、それから脇に囲つておきおりましたを、なをかみさまがやかましく言つて、とうとう氣ちがひ、首をくゝつて死にやりました。

（『東海道中膝栗毛』日本古典文学大系62巻 171頁）

同じく日本古典文学大系に収録される日本文学を代表する作品でありながら、この文章を扱う際には先の『徒然草』『百万』『父の終焉日記』と同様ではない配慮をしているのではないだろうか。つまりどこか「安全」でないように思われてしまうのである。お題目のように古典の重要性、原文で読むことの必要性、その時代の読者視線での読みの奨励などを唱えながら、もしもこの『膝栗毛』の一節を公的に語る際に何か躊躇や配慮するものがあるとすれば、日本古典文学研究者がまずその問題を炙り出し、解決していく必要があろう。

すでに精神神経医学の方面から小田晋『日本の狂気誌』が公刊されている<sup>(8)</sup>。小田の言う「狂気」はまさに精神神経医学で扱う狂気である。そのために中野三敏が説く狂とは全く異なっている。その扱う古典作品の解釈の乱暴さや杜撰さについて文学研究の立場から批判するのは簡単だが、精神神経医学の側から日本古典文学を眺めた場合にどのような側面が見えるのかに注意することも必要であろう。例えば小田は「江戸人の精神病理と病跡学」の項で、

江戸時代になると、文学研究において、いわゆる病誌学的方法を適用することが可能になる。つまり、作品に対する表現病理学的な分析と作者自身の伝記についての精神医学的側面からの考察とを総合する方法である。

として、その研究対象に上田秋成、小林一茶、平賀源内を挙げている。この3名が精神神経医学のフィールドに乗る研究対象であり、小田に拠ればもはや「精

神疾患の狂狷」という存在領域はもはやなく、「精神疾患の狂狷」があるだけである。

そこで小田の切り込み方に添う、というよりそのフィールドに乗り込みながら、平賀源内を例にとって考察してみたい。

平賀源内の文章が狂文の先蹤であることは小林ふみ子や先の中野三敏が指摘している<sup>(9)</sup>。その一例『痿陰隱逸伝(なえまらいんいつでん)』(明和5(1768)年)を挙げてみよう(用字は適宜改めた)。一節をあげれば、

天に日月あれば人に両眼あり。地に松蕈あれば  
 膝に彼物あり。其父を尻といひ、母を於奈良といふ。鳴るは陽にして臭きは陰なり。陰陽相激し無中に有を生じて此物を産む。因て字を尻子(へのこ)といふ。稚を指似といひ、又珍宝と呼。形備りて其名を魔羅(まら)と呼び、号を天禮菟久と称し、また作藏と異名す。(中略)男たる人ごとに此物のあらざるはなし。其形状大なるあり、小なるあり、長さあり短きあり。或は円或は扁。又は豊下・頭がち、白勢あれば黒陰莖あり、木魔羅あれば麴筋勢あり、

(日本古典文学大系55巻 260頁)

といった具合に、男根の異名や形態などに固執した文章である。そのいわんとするところは、

大陰は市中に痿へ、或は医に痿へ、売卜に痿へ、陶淵明は五斗米に痿へ、東方朔は金馬門に痿ゆ。功成名遂て五湖に痿るは前代未聞の范蠡が勢なり。等莖を帷幕の内にめぐらし、交接ことを千里の外にあらはし、赤松子に托して痿るは古今獨歩の張良が玉莖なり。三度口説て容られず、世の陰蝨を厭がり陰毛を刺て痿るは藤房卿へのこなり。その立つところ各異なりといへども、痿るところは皆一なり。尺蠖の屈むは信が爲なり。智者のしたがるは能く痿んが爲なり。

というあたりで、現実で不遇であった源内が世の中に向けて発した文章である。その過激さや猥雑さが後の戯作者に影響を与えたことは周知の通りで、愛

された「猥雑さ」であったのである。その源内の過激な性格はみずから「兎角是は古方家に下させずは、此肝積はなほるまい」(『放屁論後編』)と記している。源内の「狂」はこの「肝積(癩癩)」と結びついているのであった。

つまり源内はやや人よりも癩癩が強く、現実の憤懣やるかたなさを文章に託した作家であって、その特異な文体は「狂文」として日本文学研究的には処理できる。

その限りに於いては、源内はあくまでも文学研究の対象であって小田が扱う精神神経医学の研究対象にはなり得ないはずである。その源内がいかにして精神神経医学の研究対象となりえたのか。

源内は自身の性格を癩癩と考えていたが、周囲の人間の考える「癩癩」は性格のそれではなかった。『放屁論後編』の「追加」に次の一節がある。

智恵なき者智恵あるものを譏るには、其詞を用ることあたはず。只「山師」「山師」と譏るより外なし。又造化の理をしらんが為産物に心を尽くせば、人我を「本草者」と号け、草沢医人の下細工人の様に心得、已むに賢るのむだ書に淨瑠璃や小説が当たれば、近松門左衛門・自笑・其磧が類と心得、火流布・糸れきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把一トからげの思ひをなして変化龍の如き事をしらず。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或はたまたま大諸侯の為に謀りし事ども、国家の大益なきにしもあらざれども、狡兎死して良狗烹られ、高鳥尽て良弓藏る。細工貧乏人宝、嗚呼薄ひかな。我が耳垂珠と悟りを開き、露命をつなぐ営みに、当時賤しき内職にて、其糟を舗ひ其錢をせしめんと思ひ付きしを、早くも卯雲木室君に尻尾を見出され、おくり給はる狂歌に  
 酔て来て小間物見せのおて際は仕出しの櫛も  
 はやる筈なり

実にや「己れをしらざるに屈して、己れを知るに伸る」となんいへば、此御答申さんとて、我侪八百を書ちらす。固己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰く、「ア、気が違ふたそふな」。

(日本古典文学大系55巻 436頁)

軽く使っているように見えるが、源内の振る舞いを「気が違う」と表現された現象が見られる。この場合の気が違うは明らかに中野のいう文芸用語の「狂狷」の狂ではない。精神疾患の「狂」に近い。そしてそこに小田の扱う精神神経医学が介入するスペースが許容されるにいたるのである。フーコーの言葉を借りれば（前掲書8頁）、

精神病をつくりだしている澄みきった世界では、もはや現代人は狂人と交流してはいない。すなわち、一方には理性の人が存在し、狂気に向かって医師を派遣し、病気という抽象的な普遍性とおしてしか関係を認めない。

という「理性の人」（世間の人）から距離を置かれて交流を拒まれる狂気の人として源内を位置づけることが可能となったのである。それではしばらく小田の論理に耳を傾けよう。

小田は源内が幼少の頃に夢の中で読んだ「霞にてこして落すや峰の滝」というなんということのない発句を取り上げて「夢と現実の距離が近いという天才的芸術家、宗教家に共通する素質の一端を有していたことが判る」と断定する。この乱暴な断定の当否について今は問題としないが、小田は続けて歴史学者の城福勇の説を引用しながら、源内の体型が肥満型であったことをもって「分裂気質的要素を混ぜた循環気質者である」と、その断定を発展させる。まさにフーコーのいうところの、理性の人が狂人に病名という「抽象的な普遍性」を付与することで交流を拒否することが可能となった現代人の典型的な学問姿勢であろう。先に「狂狷」と「狂蕩」の区分を社会で座る位置に求めたが、小田は病名を与えることをもって「狂気の人」という隘路に源内を追い込んでいく。その意味では源内は「狂蕩」の範疇に分類されるのであろうか。

この分析方法は小田だけではないようで、近年民放で放映された娯楽番組でも源内がアインシュタインやビル・ゲイツなどと並べてADHDであり、そのため天才であったという内容を放映した<sup>(10)</sup>。その診断者は現役の医師であり、氏名や勤務病院をすべて明かしての発言であったので、小田の属する学界

では断片的で信憑性の薄い歴史資料から人間の病理を解明する方法論が許されるらしい。それが先に引用した「病誌学的方法」である。すなわち「作品に対する表現病理学的な分析と作者自身の伝記についての精神医学的側面からの考察とを総合する方法」である。まずここで注意したいのは、その立場に立てば、われわれ人文学系学問、特に近代精神医学成立以前の古典を研究する文学研究者の研究成果がこの医学領域に寄与できるという事実である。ここに本稿で取り上げた「障害史研究のための日本古典文学研究」という問いに対する一つの答えがあるのかもしれない。

しかしながら、結論を急ぐ前に狂気と文学については解決しておかなければならない問題がある。それは狂気と創造との関係、およびその狂気の人と周辺との距離、である。

#### 4 狂気と創造

狂気が創造、しかも「天才」レベルの創造に関わることを示唆する事例は多い。ピカソやサルバトール・ダリが狂気の画家として語られることも多いし、ジャン＝リュック・ゴダールの『Pierrot le fou』の邦題は『気狂いピエロ』であるし、魯迅の『狂人日記』も名作の一つであるのは、この「狂」の字が有する「何か」が人を惹き付けるのであろう。実際に「狂気の○○」というフレーズは差別というより、驚嘆や激賞を伴って使用されることが多いというのが一般的な理解ではないだろうか。

日本文学研究の方面でもその理解からの先行研究がある。

背理と狂気の世界の住人ぶって、いかがわしい作品を書くことは誰にでもできる。しかし、一待ちたまえ、果たして君自身が書くものが、その商標化でなく、本物の（あえて本物といたたいが）長い文学の伝統であった〈背理と狂気〉とよく対抗しえて、自立しうるであろうか？考えるべきであろう。例えば三島由紀夫は自殺した。高橋和巳は病死した。されども彼等は背理と狂気とどこまで涉り合っていたのか？あるい

はまったく無縁であったのか？やはり生き残っている吾等は我身にひきつけて、それらを省察すべきであろう。

(松本鶴雄『現代作家の宿命 背理と狂気の時代』(笠間書院 1976年) 13頁)

作家における〈狂気〉とはその資質か、宿命の血か、あるいは作品をつらぬく方法としてあるか。〈文学における狂気〉という課題もまたこれにかかわる。

(佐藤泰正『文学における狂気』(笠間書院 1992年) 171頁)

以上、いくつかの例に即して近世のドラマにおける「狂気」を見て来たが、それは時代物のロマンの世界では奇蹟を生み出して主人公を救うことがあった。しかし、世話物のような観客と等身大の人物が生きている世界、観客の生きているのと等質的な現実世界のドラマでは、そのような奇蹟は生まれず、みすみす破滅的な行動に主人公を駆り立てて悲劇を形成する。

(前書、松崎仁「狂気と江戸時代演劇」83頁)

その「狂気」に関わる文献に加えて、その人物と創造との関係を考察する「病跡学(Pathography)」という学問領域もある。このため狂気と創造に関わる文献の量は膨大で、日本古典文学研究の立場では全体を俯瞰することすら不可能である。本稿では平賀源内研究と関わりが持てそうなくつかの視点のみを提示するにとどめたい。

小田晋はW・ランゲ=アイヒバウムを引いて天才という概念は「ヨーロッパ的観念」で、「人間の創造力を天才という概念にまで人格化したものは、イタリアルネサンス時代がはじめて」だとする。天才は市民社会の人格理想で、詩人や美術家という精神的貴族を理想化することがそのまま自分たち自身への賞賛であったと指摘している。このW・ランゲ=アイヒバウムの考え方を適用すれば、日本古典世界に「天才」や「狂気の〇〇」は存在しないことになる。それに対して小田晋は宮本忠雄を引用して、

日本でも〈きちがい〉、〈くるい〉、〈ものつき〉などの病態は古くからいろいろな形で、問題にされてきたが、天才の人物の中で特定の精神障害にかかったことが明らかに証明されるという場合は、明治以前にはごく僅かで、すくなくとも文芸的方面では例外的にしか存在しなかった

とする。その問題意識から「例外」として扱ってよいのが平賀源内であり、小田が源内を循環気質者と断定診断せざるを得ない原因となっている。しかしながら、この理論を追いかける場合、われわれ日本人は自分たちの成熟した市民社会で自己陶醉するために、文芸や芸術分野に「狂気」を求めていることとなる。それは一面間違ではないが、その自己陶醉が高じてついには古典世界にも「狂気」や「天才」を無理に求めることになってしまうことに新たな問題が生じる。古典世界で天才や狂気という「称号」を現代人が与えてよいとする条件としては、その人物に現代精神医学から病名という「抽象的な普遍性」を付与することが可能な人物に限定される。ゆえに「病誌学的方法」が重要視され、古典研究の作品論や作家研究がそこに貢献するという構図が生まれるのであるが、果たしてそこに問題はないのであろうか。

例えば、写楽の浮世絵を狂気の賜物と賞賛したい論者がいるとしても、写楽は伝記が不明であるためにその定義は認められないこととなる。源内と写楽はどこに違いがあるのだろうか。すなわち「病誌学的方法」の成否は日本古典文学研究の成熟度に左右されるのであり、日本古典文学研究の限界はそのまま「病誌学的方法」の限界ということになる。源内のケースに立ち戻れば、城福勇<sup>(11)</sup>や小田晋が源内の異変を語る際に用いる次の『鳩溪遺事』である。

予、童時、山内士訓の家に句読を学びし時、南畝翁来りて士訓に告て曰、「扱々の傷、鳩溪失心して内弟子を害せり。一豪傑を失へり。嘆嗟に不堪。此度の事こそあらめ。一二月以前、或人、鳩溪に送りて紙を呈し書を請ふ。源内答て、我此頃得意の画有。可絵とて紙を展、岩上一人溺(筆者注：小便のこと)をなし、岩下一人の頭に溺流れかゝりしを、其人泣涕して坐したる

図をなす。甚意気揚々として大に悦ぶ色あり。其人画意を不得。鳩溪素より深謀遠慮の人也。定て微意あらむと持帰り、数日考れども其意を得ず。爾後数日にして失心せり。此時已に顛狂の萌有けるや」と語る。

(日本女子大学本『鳩溪遺事』)

殺害に至った源内の奇矯な行動と、それに対する周囲の困惑が語られている。ここに「失心」「顛狂」とあるので、源内が人を殺害した理由を「狂」だと南畝が把握していた客観的資料として採用となる。この資料により「病誌学的方法」論に従い源内の「狂気」が立証されたために、小田は、

彼の性格や事の経過、発病年齢からも分裂病ではないであろう。むしろ、G・シュベヒトのいうように、強力的で、体質的にも軽躁性素質のある人や慢性躁病者が、高い自己評価を保ったまま、不全型の抑うつ性気分変動が重なり、そこに敵意、不信、嫉妬などが生じ、これに体験が加わって妄想を生じるといった機制が想像される。

彼の犯行状況として、木村黙老のいうような「酩酊した後目が醒めたあと」であるという記述が重要である。あるいは、直接誘因としては、H・グッデンのいうアルコール性ねぼけが状況の誤認または情動や憎悪の直接の引金となったのではないか。

と診断している。この診断が正当性を有するには『鳩溪遺事』の資料としての信憑性、木村黙老の発言(『聞ままの記』)の妥当性が担保されていなければならない。しかしながら、残念なことに両者ともに信憑性がない。『鳩溪遺事』については、現在最善本は日本女子大学蔵本であるが近年に見つかった本であって、城福や小田は参観できなかったものである。木村黙老の発言はその新出の日本女子大学本『鳩溪遺事』によって誤りであることが明らかとなった<sup>(12)</sup>。小田がもっとも重視した「酩酊した後」は完全な誤りで、そもそも源内は酒が苦手である。その誤った

資料と研究成果に基づいた小田の診断は誤診といわざるを得ず、その欠点はそのまま「病誌学的方法」の限界を露呈させているのである。「狂気と創作」というわれわれが古典文芸に見いだしたいユートピアを描写するには、まず古典文学研究のさらなる精度ある成果が必要であろう。

同様の指摘は現代の精神病理学でも可能である。松本卓也はヤスパースの病跡学の定義を引いて、

病跡学の対象は、主に作家や画家のような芸術家や、天才的な科学者のような傑出人であり、特に何らかの精神障害を患っているのではないかと思われる人物です。その人物について書かれた伝記や、自身が書いた日記や書簡などを参照して、病の経過を丹念に追ってみると、その人物のつくった個々の作品と病の経過が密接に関係していることがわかってきます。

とするが、その天才的作家に平賀源内を設定する場合、作品分析、「その人物について書かれた伝記」「自身が書いた日記や書簡」を正しく提供するのが古典文学研究の仕事であろう。古典文学研究と病跡学とは不即不離の関係にあるといえる。そしてその病跡学とのコラボレーションから狂気と創作との考察が生産的な議論となる、という見通しを持つことができる。

## 5 まとめと展望

以上、本稿では日本古典文学研究者が日常に扱うテキストやデータベースに障害を示す言葉や文章、作品が多くあることを指摘した上で、日本古典文学者がいかにその現実に意識的であるべきかどうか、意識的であればどのような貢献ができるのかという問題意識を提示した。松井彰彦の障害者という概念成立以前の古典研究の重要性という発言を承けて、われわれはミシェル・フーコーの語る狂気を重ねざるを得ない。フーコーは「監禁され排除された狂気は一九世紀に文学の世界に回帰」することを論じたが<sup>(14)</sup>、これは逆に言えば松井の指摘するように、障害という概念がなかった古典時代における健常者／

障害者のあり方を現代社会に照射する機能を有するであろう。そこで本稿では古典における「狂」に着目した。

古典の狂は大きく二つに分けることができる。狂言、狂歌などの文芸用語として市民権を得ている狂と、障害の領域に包含される狂である。狂気、狂人と言っても前者／後者のいずれを指すのかによって扱いが変わる。そして風狂、狂狷、平賀源内のようにそのグレーゾーンに属する事例がある。

そのグレーゾーンに関わって、精神神経医学では小田晋のいう「病誌学的方法」、松本卓也の言うところの「病跡学」を祖上にあげた。これは創造と狂気との関係を解く鍵として注目されるが、その前提となるのがその作家の伝記とテキスト提供・分析、書簡の解説の正しい研究成果である。すなわち日本古典文学研究の研究成果である。古典文学研究が前近代の天才と名作、狂気と天才を扱うことは自明の理であることの、「自明」にもっと自覚的であるべきだ。その「自覚的」の一つは自分たちの研究成果を発信すること、医学の現場に届けることである。本科研の報告書（本誌）はまさにその実験的試みとして評価されるべきであろう。

最後に展望を示したい。本稿では、日本古典文学研究と障害史研究との架け橋は存在するのかという冒頭の問いに対して、狂気とそれゆえの創造の問題を取り上げ、病誌学的方法、病跡学に日本古典文学研究の成果が貢献できるという結論を導きだし、一応の回答を示した。しかし松井彰彦の指摘するように、古典時代の障害者と健常者の関係性から現代に問いかける重大なものがある。ミシェル・フーコーが「狂気という現象は昔からあったけれども、17世紀の中頃までは、西欧の社会は狂気に対して驚くほど寛容だった」と言うような<sup>15)</sup>状況が日本にもあった。人を殺害し牢死した源内を大田南畝や江戸戯作者たちが懐かしみ、その作品を集めて『風来六部集』『飛花落葉』を刊行し、杉田玄白は墓誌を製作している。式亭三馬は二代目風来山人（源内のペンネーム）を名乗った。源内は隔離されるどころか、いつまでも彼らの「圈内」に愛されて生きていたのである。

そのような「隔離」が精神病者を規定するという皮肉な状況がなかったのが古典時代の特長であるの

である。その状況の中で、健常者／障害者は現実を生きただけであり、その実態を分析する材料として歴史資料とともに古典文学テキストがある。日本古典文学テキストに障害者の存在を示す記述が多いことは冒頭で述べたとおりである。その健常者／障害者が隔離されずに生きた社会をかりに「共生」と呼ぶことが許されるなら、「共生」の手がかりと困難さなどの諸問題は日本古典文学研究の立場から提示することも可能なのではないだろうか。

忘れてはならないことは、現代でも平賀源内ファンが多いことである。彼らは源内の狂気を承知の上で、というよりもむしろ狂気故の作品や行動を積極的に愛しているのである。つまり狂気の人（源内）と現代の理性の人が無理なく共生している世界がすでに当たり前のよう存在しているのである。それは例えばリス・キャロルをめぐる状況でも同様の現状認識が得られる可能性と汎用性を如実に示している。このことに日本古典文学研究者は自覚的であるべきである。

折しも国文学研究資料館も関わるエコヘルスプロジェクト（人間文化研究機構・「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」）も展開中であって、日本古典文学研究の側からも積極的に医学や共生社会に発信する機運も生まれている。その中であって本誌が提示する「障害史研究」の内実が問われるべきであろう。

## 注

- (1) 同書については、本科研の第1回研究会における山下麻衣の研究発表によって教示を得た。
- (2) 勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』（文学通信、2019年）
- (3) 松井彰彦「神話のなかの障害者」（山下麻衣編『歴史のなかの障害者』、法政大学出版局、2014年、83頁-84頁）
- (4) 中野三敏『戯作研究』（中央公論社、1991年）246頁-261頁
- (5) 中野三敏「狂文論」（『戯作研究』、中央公論社、1991年）262頁-281頁
- (6) 「誰か孔子の如く狂士を思う」（『倉田貞美著作集』、2019年、明德出版社）669頁-673頁、原文は若干の誤脱が認められるので、適宜補正を施した。
- (7) ミシェル・フーコー『狂気の歴史——古典主義時代

- における』(田村俣訳、新潮社、1975年)40頁
- (8) 小田晋『日本の狂気誌』(講談社学術文庫、1998年)265頁-303頁
  - (9) 小林ふみ子「『風来六部集』(狂文)」(『江戸文学事典』、文学通信、2019年)441頁、中野は前掲(5)。
  - (10) 2015年8月20日放映、BS日テレ「片岡愛之助 解明! 歴史捜査」、ちなみに筆者も前半部に登場している。
  - (11) 城福勇『平賀源内の研究』(1976年、創元社)、413頁-433頁
  - (12) 福田安典「平賀源内の死の前後」(『医譚』107号、2018年6月)
  - (13) 松本卓也『創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで』(2019年、講談社)、20頁-39頁
  - (14) 前掲(13)35頁

なお、研究協力者として、文中における英語表記について以下の2名のチェックを経た。もちろん最終責任は著者が負う。

David. R. Bogdan…愛媛大学教授。専門は言語学。  
ボグダン真理愛…愛媛大学大学院修了。拙著『医学書のなかの「文学」』(2016年笠間書院)の英語リード文担当。

なお、文中に今日的には不適切な用語があるが、当時の表現を重んじて使用していることを断っておく。

### 参考文献

- 福田安典『平賀源内の研究——大坂篇』(ペリかん社、2013年)  
福田安典『医学書のなかの文学』(笠間書院、2016年)  
勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(文学通信、2019年)  
山下麻衣編『歴史のなかの障害者』、法政大学出版社、2014年)  
中野三敏『戯作研究』(中央公論社、1991年)  
ミシェル・フーコー『狂気の歴史——古典主義時代における』(田村俣訳、新潮社、1975年)  
小田晋『日本の狂気誌』(講談社学術文庫、1998年)  
小林ふみ子「『風来六部集』(狂文)」(『江戸文学事典』、文学通信、2019年)  
城福勇『平賀源内の研究』(1976年、創元社)  
福田安典「平賀源内の死の前後」(『医譚』107号、2018年6月)  
松本卓也『創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで』(2019年、講談社)  
松本鶴雄『現代作家の宿命 背理と狂気の時代』(笠間書院 1976年)  
佐藤泰正『文学における狂気』(笠間書院 1992年)